國學院大學学術情報リポジトリ

山車の伝播と受容：仙台東照宮祭礼をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 志乃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002041

山車の伝播と受容
―仙台東照宮祭礼をめぐって―

鈴木志乃

要旨

仙台東照宮祭礼は明暦元（一六五五）年に始まった東照宮の祭礼で、藩政時代の仙台城下において最も盛大に行われていた山車祭礼である。この祭礼は東照宮の例祭であることから、徳川幕府の瓦解により江戸末期に一度は途絶するが、その後、近代に入ると再び城下の神社祭礼などで行われるようになる。しかし、経済的かつ電線などの影響により明治後期に断絶するに至る。その一方で、仙台東照宮祭礼の山車は、旧仙台藩領を中心とした地方に伝播し、各地の山車祭礼において同形態の山車が巡行され、伝承されていることがわかった。本稿では、このような近世都市祭礼における山車が、伝播による周辺地域の山車祭礼への影響について、旧仙台藩領である宮城県登米市登米町の「登米秋まつり」を事例に考察を試みた。その結果、仙台東照宮祭礼と極めて類似する山車が伝承しており、仙台藩領を中心にひとつの山車文化圏が形成されていたことがわかった。

キーワード

仙台東照宮祭礼、登米秋まつり、山車、伝播、旧仙台藩領、近世都市祭礼

一、はじめに

山車を伴う祭りは全国的に広く分布している。山車とは祭りに担がれ、または曳かれる屋台の総称で、山や人形などの飾りがついたものや囃子を主要とした囃子屋台など諸種の形態がある。呼称は地域によって異なり、山車（だし）・山（やま）・屋台（やたい）・山鉾（やまぼこ）・檀尻（だんじり）などと呼ばれている。植木行宣[1]や山路興造[2]などの研究によって明らかにされているように、山車は都市祭礼の中で発展し、その始まりともいえる平安京の祇園御霊会における山鉾が各地に与えた影響は大きいといえる。その一方で、黒田日出男は、現在行われている祭礼の多くは江戸時代を通じて展開し、発展してきたと指摘しており、「近世の〈祭り〉が中世のそれとまったく違うことも見逃してはならない。すなわち、近世になると〈祭り〉の文化が一気に花開き、全国各地に個性的な〈祭り〉の行列が生み出されたのだった。それは、近世には、数多く城下町や宿場町などが全国に一斉に成立したことによっている。爆発的に誕生したそれらの近世都市の何処ででも、〈祭り〉とその行列が生み出されたのである。今日われわれが楽しんでいる〈祭り〉の行列の多くは、直接的には、そうした近世起源の祭礼行列なのだ。[3]」と述べている。さらに、近世を代表する祭りのひとつとして東照宮祭礼をあげており、「徳川家康を東照大権現として祀る幕府体制の成立によって、こぞってその城下に東照大権現を勧請して、東照宮を造営した。全国で五百以上の東照宮が創建されたのである。そして、そうした東照宮の〈祭り〉が全国各地で盛大に行われるようになったのである。つまり近世権力は、各都市で東照宮という新しい神格をまつる〈祭り〉を創始したのである。（中略）こうした色濃い政治性・イデオロギー性を抜きにして、近世の〈祭り〉を語ることはできないのである。[4]」としている。このような点から、現在の祭礼と近世の都市祭礼を合わせてみていく必要があるといえる。すなわち、近世の都市祭礼においてどのような山車が存在していたのかを明らかにすることにより、現在の山車がどのように展開してきたのかわか

ると考えられる。

そこで本稿では、旧仙台藩領を対象に山車祭礼の展開について検討した。旧仙台藩領における近世都市祭礼の代表は仙台城下で行われていた仙台東照宮祭礼であり、これについては、仙台郷土研究会『仙台郷土研究』第六巻第六号[5]に掲載されている諸論文で明らかにされている。仙台東照宮祭礼とは明暦元（一六五五）年に始まった東照宮の祭礼で、毎年九月十七日に行われていた。その後、明治三十二（一八九九）年に断絶している。別名「仙台祭」と呼ばれていた（以下「仙台祭」とする）。この祭礼の特徴は大規模な山車が出るところにあり、多いときには七〇基の山車が出たとされ、その一基に対する担ぎ手は七二人に及んだといわれている。山車の上には人形の造り物が配され、歌舞伎、能、伝説や中国の故事伝来を主題とした物語が展開している。

仙台祭と旧仙台藩領の山車祭礼の比較研究として、佐藤雅也[6]は「宮城県および旧仙台藩領の山車祭は、そのほとんどが仙台祭が起源、原型となっていると考えられる。」とし、さらに千葉雄市[7]は「仙台領内でも、御一門御一家といわれた藩の大身の殿様たちの城下町や大きな宿場町、港町などでも、鎮守の祭礼の大半には、やはり「ヤマ」祭りが出されていました。もちろん本藩城下の仙台祭とはその規模は違っていても、それぞれに財力相応のものが行われていたようです。往昔にあるいは先年までは盛大な「ヤマ」祭りが出されていた証拠ともいえる写真などが残っています。これらはみな仙台祭りと極めて相似していて、今流でいえば仙台祭りのミニ版といったものでした。」と指摘している。

宮城県において現行の山車祭礼については、「全国神社祭礼総合調査[8]」（一九九五）による三九例、宮城県教育委員会「山車・屋台・船などのでることに特色のある祭り・行事[9]」（二〇〇九）による二二例が報告されている。さらに、自治体史から山車を伴う祭礼を採集し加えると、総数六三例に及ぶ。ここでは、旧仙台藩領のひとつである宮城県登米市登米秋まつりを事例に検討した。

二、仙台東照宮祭礼

江戸時代、徳川幕府に対する忠誠心を示すために全国各地に数多くの東照宮が勧請された。仙台では、承応三（一六五四）年に二代藩主忠宗によって勧請されている。東照宮が勧請された理由の多くは、家康が訪れたとの由緒をもつことや徳川家との縁戚関係に起因する。中野光浩[10]によれば、「将軍家光が勧請の許可を与えた大名は、三〇万石以上の国持大名で、かつ縁血関係をもつもの」を条件として示している。伊達藩の石高は、寛永十一（一六三四）年には六二万石に及んでいる。また、仙台藩伊達家は、家康と縁故深く、藩祖政宗の長女五郎八姫を家康六男忠輝に嫁がし、さらに、政宗の嗣子で二代藩主の忠宗は、慶長十二（一六〇七）年に家康の娘市姫と婚約し、市姫が結婚前に没すると、家康の外孫である振姫が二代将軍秀忠の養女となった後に、忠宗の正室として迎えられている[11]。このような関係から二代藩主忠宗は仙台に東照宮を勧請することを願っており、慶安二（一六四九）年五月二十八日、三代将軍家光からその許可を得た。『伊達治家記録[12]』の慶安二（一六四九）年五月二十八日の条に、勧請に関する幕府の許可が記されている。

慶安二年五月廿八日丙戌、歸國御暇ノ御禮トシテ御登城御目見アリ、是ヨリ前、東照大権現ヲ仙臺へ勸請シ玉ヒタキ旨御願仰上ラル、今日公方御直ニ勸請ノ義仰出サル（以下略）

その後、翌六月二日に江戸を出発し、九日申刻仙台城に到着、東照宮建立の諸準備がなされ、八月十七日に東照宮普請始を行った。

社殿は、仙台城の艮（北東）の方角にあたる小田原村に造営された。この地は、玉手崎と呼ばれる丘陵で、もともと寛永十七（一六四〇）年に忠宗が修築した天神社があった。これをさらに東側に移して小田原天満天神社（一六五〇年六月造）とした。さらに寛文七（一六六七）年に現在の榴ヶ岡に移

転し、榴ヶ岡天満宮と呼ばれるようになった。[13]

ここ東照宮の例祭である仙台祭は、祭日を九月十七日としていた。本来、徳川家康の命日である四月十七日に実施すべきであるが、この時期は山車の担ぎ手を担う百姓が田植えなどで多忙のため、刈り上げが終わる九月の時期に変更して行われていた。

山車を出す町は、惣町という仙台城下の主要な町人町と決まっていた。惣町は二四ヶ町からなり、大町三四五丁目、肴町、南町、立町、柳町、荒町、大町一二丁目、国分町、本材木町、北材木町、北目町、二日町、染師町、田町、新伝馬町、穀町、南材木町、河原町、上御宮町、下御宮町、亀岡町、支倉澱橋町、北鍛冶町、南鍛冶町である。

このうち大町三四五丁目から荒町までの六ヶ町は伊達郡以来の御譜代町であり、惣町の中でも最上位の集団として位置づけられていた。それ以外の町は城下の拡張発展に伴い形成されていった町である。

これらの二四ヶ町は藩の経済政策の一環として、城下の豪商になるべく金を使わせようと、仙台祭にあたっては、各町から山車を出すことが藩から定められていた。一方で、山車を出す町は藩への上納金を免除されるという特権を持っていた。また、財力のある大店などは個々で山車を出していた。藩主が上覧する祭礼だったため参加できることは大変名誉なこととされていた。

仙台東照宮祭礼についての古記録をみると、仙台最古の地誌とされている元禄年間に成立した『仙台鹿の子』[14]には、「明暦元年九月十七日より御神事始まり惣町より色々の作物を大なる臺にかざり御神輿の先にかつぎ出る日本一番の御神事なり」「此道は筋は何れも桟敷を仕掛け遠近の老若男女ひしと詰めかけ錐を立つる隙もなかりしとで太平の世とはいへ盛んなる事共なる」とある。

また、七代藩主重村の命で、仙台藩の儒学者田辺希文が編纂し、明和九（一七七二）年に完成した仙台藩領の地誌『封内風土記』[15]によれば、「九月十七日を以って祭日と為し府内十八ヶ處の市店を三分して歳の間て、各々屋臺人物花菓等を造り府内の街衢に亘り市人相競ふて共に華美を盡す此日や國を通じて群集し街に満ちて奔走し簞食壺漿して觀る者堵の如し實に一年偉觀なり」と記されている。

さらに、『仙府年中往来』[16]には、「九月十六日より十七日東照宮祭礼、仙台まつり、山鉾等美を盡したる結構言うばかりなし、遠近の老若歩行を運び寄集う事人の山をなす、十七日は御神輿渡御、先陣後陣は綺羅を飾りて行列殊に聲花なり、御通筋の町々に桟敷掛け、行儀を直し、畏って是を拝見す、山鉾の絵図売、其外土産の品々を売買う商家の賑はいうも中々遑あらず」と記されている。

こうした諸記録からは当時の仙台祭の様子を見て取れ、街中大変な賑わいをみせていたことがわかる。

明治時代になると、徳川幕府の衰退と共に東照宮の権威は消失し、江戸以北最大の祭りとされた東照宮の祭礼も惣町の手を離れその勢いを失った。しかし、次の記録から明治に仙台祭が行われていたことがわかっている。

明治期の仙台祭について三原良吉[17]は「維新後明治三年までは記録も絵図も無いので仙台祭りが行われたかどうか分からない。われわれが文献の上で初めて明治になってからの仙台祭りを見出すのは四年の天長節奉祝に行われたそれである。東照宮祭礼から天長節奉祝へ、そこに仙台祭りの大きな転機があり以後概ね一定はしなかったが榴ヶ岡明神宮祭礼、青葉神社祭礼、招魂祭、仙台奠都三百年祭と続きその内招魂祭に出したのが一番多かった」と述べている。

こうした記録から近代における仙台祭の実施状況をまとめると（表）のようになる。計一一回の実施が確認されており、このうち最も山車が出たのは明治四年の天長節である。明治十三年には四基と減少し、その後は十基前後にとどまっている。また祭日をみると、近世は九月十七日のに固定されていたのに対し、天皇誕生日を奉祝した天長節（明治四年）、遷座を記念した櫻ヶ岡大神宮祭礼（明治五年）、伊達政宗の命日である青葉神社祭礼（明治十

表）近代における仙台祭の実施状況

No.	年号（西暦）	祭日	祭礼名	神社	山車の数
1	明治４年(1871)	９月22日	天長節奉祝	不明	23基
2	明治５年(1872)	９月17日	櫻ヶ岡大神宮祭礼	櫻ヶ岡大神宮	19基
3	明治15年(1882)	５月24日	青葉神社祭礼	青葉神社	10基
4	明治20年(1887)	10月12日	招魂祭	招魂社	20基
5	明治21年(1888)	10月28日	招魂祭	招魂社	20基
6	明治23年(1890)	11月23日	招魂祭	招魂社	４基
7	明治24年(1891)	11月14日	招魂祭	招魂社	７基
8	明治25年(1892)	11月12日	招魂祭	招魂社	10基
9	明治28年(1895)	不明	招魂祭	招魂社	不明
10	明治29年(1896)	５月15日	招魂祭	招魂社	10基
11	明治32年(1899)	５月23日	仙台奠都三百年祭	青葉神社	10基

五年）、戦死者慰霊のための招魂祭（明治二十・二十一・二十三・二十四・二十五・二十八・二十九年）、仙台開府三百年祭を記念した仙台奠都三百年祭（明治三十二年）など、神社の記念祭や天皇・軍隊の奉祝において行われるようになっている。近代以降のこうした変化をみていくと、仙台祭が天長節など国家祭祀に取り込まれていったことがうかがえる。

このように仙台祭は徳川幕府の瓦解とともに一度は途絶したものの、近代に再び城下の神社祭礼や国家祭祀などの大きな行事において山車がだされていた。しかし、電線の影響や惣町の経済難などから明治三十二（一八九九）年の仙台奠都三百年祭を最後に断絶するに至るのである。

三、山車の伝播と受容―登米秋まつりを例に―

仙台祭が途絶えた一方で仙台祭の山車は地方の山車祭礼の中に伝播していった。そのひとつが「登米秋まつり」である。宮城県登米市登米町は宮城県の北部に位置する町で、町の中央には北上川（岩手県から宮城県を流れる東北最大の河川）が流れ、東側に北上山地、西側は田園地帯となっている。平成十七年に登米郡内の各町と合併し登米市となる。現在の登米町は江戸や明治の建造物がそのまま残っており、江戸時代の町割りの地名が現在も使われている。

江戸時代の登米町は、登米伊達藩が置かれており、伊達藩の家格の中で最上位にあたる御一門に属していた。伊達藩では、六二万石の広大な領地を統治するため、領内各所に城・要害・所・在所を設け、地方の政治的・軍事的拠点としていた。要害は城に準ずる城館のある要地で、藩の内外に対する軍事的拠点としての役割を担っていた。所は要害に次ぐ要地で、地方の交通や商業の拠点である地に配置されていた。在所は農村部で家臣が拝領した屋敷が置かれていた。[18] このうち、登米伊達藩は要害にあたる。石高は二万千石を有していた。要害の周辺には陪臣の屋敷（家中屋敷）・寺屋敷・町屋敷などから構成されている小城下町が形成されており、[19] 登米町も同様に武家地・町人地・寺社地などの町割が設けられ、城下町が形成されていた。

祭の由来・変遷について概観したい。登米秋まつりは登米町の寺池道場山に鎮座する登米八幡神社の例祭である。登米八幡神社は、藩政期、領内の総鎮守として藩主から登米伊達藩主から尊崇されていた神社である。『登米町誌』[20] によれば、登米八幡神社が創建（康平五（一〇六二）年）されて以来、毎年春と秋に例祭が行われ、江戸時代からは春と秋のうち秋祭を本祭とし、毎年八月十五日に行われている。

現在につながる祭典の形式が整ったのは延宝三（一六七五）年の頃といわれている。藩が祭りに関わるのは、五代藩主村直【在位：寛文一〇（一六七〇）年～宝永六（一七〇九）年】の頃で、天然痘にかかった村直が登米八幡神社に病気平癒を祈願し、その経過が良好だったため、同年の例祭から神輿渡御に加わったとされている。この祭礼の様子について登米藩史料をまとめた『白達記』[21] によると、行列に参加した武頭はもとより、その前後に従う者たちも華麗かつ出陣さながらの装束であったという。また、この時行列に参加した武頭は一人のみで、前後の行列は全員足軽だけだったとされている。この時から現在に至るまで登米伊達藩の当主は武者行列として祭礼に参列し

ている。

登米秋まつりと仙台東照宮祭礼の山車の関連性についてみていくと、山車が祭りに加わるのは、九代藩主村良【在位：宝暦二（一七五二）年～天明六（一七八六）年】の頃からとされている。[22] 江戸から明治期は山車を出す町は契約講によって定められ、荒町・三日町・金谷・九日町・中町の五つの町人町であった。明治頃までは、ひとつの町内で山車が数基出ており、このことなどから財力に応じて大店などが個人で山車を出していたと考えられる。昭和二十年頃を過ぎると、五カ町以外の町内でも山車を出すようになる。この要因としては、交通路の整備による五カ町の経済変化が考えられる。『登米町誌』[23] によると、陸運の不便な奥州では北上川の水運を利用して、仙台・一ノ関・盛岡及び八戸の諸侯らが領内の産米の回収と江戸への回漕を行っていた。しかし、明治四十二年九月一日に東北本線が開通され、交通路は水運から陸運へと変化した。その影響により、船着場として栄えた五カ町が次第に財力を失っていったと考えられる。

次に山車の特徴について考えたい。**図1—①**と**②**は平成二十二年の九月十八・十九日に行われた登米秋まつりの山車である。両者とも九日町の山車で題目は「助六ゆかりの江戸桜」である。山車の形態を細かくみていくと、まず、中央には物語の主人公となる助六の人形が配置されている。その左右には桜の木があり、その下にはごつごつとした黒いかたまりがみえる。これは「岩山」と呼ばれるもので、岩石を表現していると考えられる。この岩山は竹籠や針金で丸味をつくり、そこに紙を重ねて張り、黒く塗ったもので、張り子で作られている。岩山に青く細長いものが垂れ下がっているが、これは滝の流れを表現したものである。**図1—①**は山車の正面を撮影したものだが、この背面にあたるのが**図1—②**である。背面は「見返り」と呼ばれており、正面と合わせてひとつの物語が展開されている。正面と同様に、中央に人形が配され、左右には桜の木、その下には岩山があり、そこに水流が表現されていることがわかる。

このような山車の形態は過去の祭礼にもみることができる。**図2—①**は明治四十二年の山車である。山車は中町のもので題目は「新田義貞」である。これをみると、中央に人形が配され、左右には樹木、その下さらに上にも岩山がある。岩山の中央には水流があり、平成二十二年のものと同様の特徴を持っていることがわかる。

続いて**図2—②**は、同じく明治四十二年の三日町の山車で、題目は「鞍馬山牛若修業の躰」である。さきほど指摘したように、ここにも人形・樹木・岩山・水流の特徴がみられる。さらに新たな特徴として、人形の周りに四本の柱とその上に屋根があり、屋形のような形態をしている。

さらに時代を遡ると、**図3**は明治二十五年の山車の図である。登米秋まつりに関する唯一の絵図である。これをみると、いくつもの山車が描かれており、中央に人形、横に樹木、下に水流、さらに屋形が描かれていることがわかる。同じ形態の山車がいくつも見受けられることから、登米の山車は人形・岩山・樹木・水流・屋形が大きな特徴と考えられる。

このような特徴を持つ登米の山車は、仙台祭の山車と極めて類似しているのである。**図4**は明治二十五年の招魂祭の絵図である。招魂祭は「**二、仙台東照宮祭礼**」で取り上げた近代に行われた仙台祭のひとつである。

図4の山車を細かくみていきたい。まず、中央に人形があり、左右には樹木、下には岩山、水流、さらに上には屋形が描かれており、登米と同様の特徴を持っていることがわかる。また、山車の題目をみると「国分町の山車孟母断機の躰」とあり、学問を進めた中国の故事から取材している。登米秋まつりの山車の題目と比べてみると、**図3**の九日町の山車の題目には菅原道真とあり、学問と関係している。このことから山車の題目も同じ様なモチーフであることがわかる。**図5**は同じく明治二十五年の招魂祭の山車である。**図3**と同様に中央に人形、下には岩山、上には屋形と同じ特徴を持つ山車がいくつも出ており、**図3**の登米の山車と比べても非常に形態が類似している。さらに**図6—①～⑥**は明治三十二年の仙台祭の写真である。⑥以外の山車に

は全て屋形があり、④以外には人形が配されている。また、全てに岩山・樹木・水流がある。

では、近世における仙台祭の山車はどうだったのでだろうか。**図7—①～④**は嘉永三（一八五〇）年の仙台祭を描いた年中行事絵巻である。ここに描かれている山車は総数三三基あり、このうち二〇基が屋形を伴っている。さらに、人形・岩山・樹木・水流も見受けられる。屋形・岩山・人形・水流・樹木の飾りは近世から続いてきた特徴だったことがわかる。

登米秋まつりと仙台祭の規模を比較すると、明治二十五年頃の仙台祭は資金繰りの問題や電線の影響などにより徐々に山車の規模が縮小し、祭りの維持が困難となっている。[24] 一方、この時期の登米秋まつりはというと、明治二十五年の東北日報の記事に登米秋まつりの模様が記載されている。

登米町にては稲作の豊熟と言ひ且つ本年は製紙の高値をとりしため一般の景気頗る能く随つて市中の金融も宜しきより農商共富豊と祝し陰暦八月十五日同町鎮坐登米神社祭典の日を卜し一大祭典を施行略其模様を記さんに市中には山車背負花等百五十餘個、次に奮藩士に在つては打揚仕掛花火及ひ登米の特産なりと誇稱する鼠花火等催しある筈にて又た近郷近在にては今より祭典の日を待居るもの、如に評判も一方ならず允も當町に大祭のありしは十余年以前にありしのみなるゆゑ近頃目覺しき大祭なるべし

ここに示されているように、仙台祭とは対照的に非常に盛んに行われていたことがわかる。

四、おわりに

このように近代以降仙台祭が衰微する一方で、登米では山車祭礼が盛んに行われていたことがわかる。近世から仙台藩領内において仙台は政治や経済の中心であった。そこを中心に同藩領内の城下町とモノや文化の交流があり、山車もまたこのような交流を通して伝播していったと考えられる。登米の山車も仙台祭の山車と形態が類似していることから、仙台祭の影響を受けながら発展していった可能性が考えられる。

文化形成のあり方について米山俊直は『小盆地宇宙と日本文化』[25]の中で、「日本列島にはおよそ百をかぞえる地方的な社会文化的な統合があり、ひとつの文化の単位を持っていた」と述べており、さらにその単位を「小盆地宇宙」と名付け、盆地の中心に領主の居城とその城下町があり、そこにひと・もの・情報の交流がある、と指摘している。

このような点から、今後旧仙台藩領内の山車を考えていくうえで、領主の祭礼である仙台祭の山車との影響関係を踏まえながら捉えていくことが重要であるといえる。

註

（1）植木行宣『山・鉾・屋台の祭り—風流の開花』白水社　二〇〇一
（2）山路興造「祇園祭の歴史」（図録『祇園祭大展』（財）祇園祭山鉾連合会・京都府京都文化博物館・京都新聞社　一九九四）
（3）黒田日出男「〈祭り〉の時代としての近世」（図録『にぎわいの時間—城下町祭礼とその系譜—』土浦市立博物館　一九九三）
（4）黒田前掲註（3）
（5）仙台郷土研究会編・発行『仙台郷土研究』第六巻第六号　一九三六
（6）佐藤雅也「宮城県における山・鉾・屋台を主体とする祭礼行事」（仙台市歴史民俗資料館編『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』第一八集　一九九九）
（7）とよま囃子保存会編・発行『登米の秋まつり』一九八九
（8）『平成「祭」データ』（全国神社祭祀祭礼総合調査）神社本庁　一九九五　（CD—R）
（9）岩手県教育委員会・宮城県教育委員会・福島県教育委員会『北海道・東北地方の祭り行事』二　海路書院　二〇〇九
（10）中野光浩「諸大名による東照宮勧請の歴史的考察」（『歴史学研究』七六〇号　青木書店　二〇〇二）
（11）仙台市史編さん委員会編『仙台市史』通史編三近世一　仙台市　二〇〇一
（12）仙台藩の正史。この条は『義山公治家記録』からである。引用は豊島二郎「仙

臺東照宮創建と藩主の参拝」（仙台郷土研究会編発行『仙台郷土研究』第六巻第六号　一九三六）によった。

(13) 豊島前掲註（12）

(14) 内藤弥一郎『仙臺社寺明鑑』第一巻　耕文堂　一九〇六

(15) 田辺希文『封内風土記』第一巻　宝文堂　一九七五

(16) 「仙府年中往来」（宮城県古文書を読む会編・発行『参詣往来―「宮城県古文書を読む会」三十周年記念誌―』二〇〇七）

(17) 『仙台郷土研究』前掲註（5）

(18) 仙台市史編さん委員会編『仙台市史』通史編三近世一　仙台市　二〇〇一

(19) 『仙台市史』前掲註（11）

(20) 登米町誌編纂委員会編『登米町誌』第二巻　登米町　一九九一

(21) 野村紘一郎『白達記（全）―登米伊達伝承録』とよま振興公社　二〇〇四

(22) 『登米町誌』前掲註（20）

(23) 登米町誌編纂委員会編『登米町誌』第三巻　登米町　一九九二

(24) 『仙台郷土研究』前掲註（5）

(25) 米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店　一九八九

画像資料引用文献

図1　筆者撮影（平成二十二年九月十八・十九日）

図2　個人蔵

図3　とよま囃子保存会編・発行『登米の秋まつり』一九八九

図4　『東北新聞』一八九二年十一月九日朝刊

図5　明治二十五年十月二十一日「招魂祭山鉾の図」（特別展図録『祭礼と年中行事』仙台市歴史民俗資料館　二〇〇三）

図6　友部伸吉・今泉寅四郎『仙台開設三百年記念祭誌』池田勝四郎　一八九九

図7　常盤雄五郎『仙台年中行事絵巻』仙台昔話会　一九四〇

図１－①　平成22年・登米秋まつり

図１－②

図２－①　明治42年・登米秋まつり

図２－②

図３　「登米神社祭典の図」（明治25年）

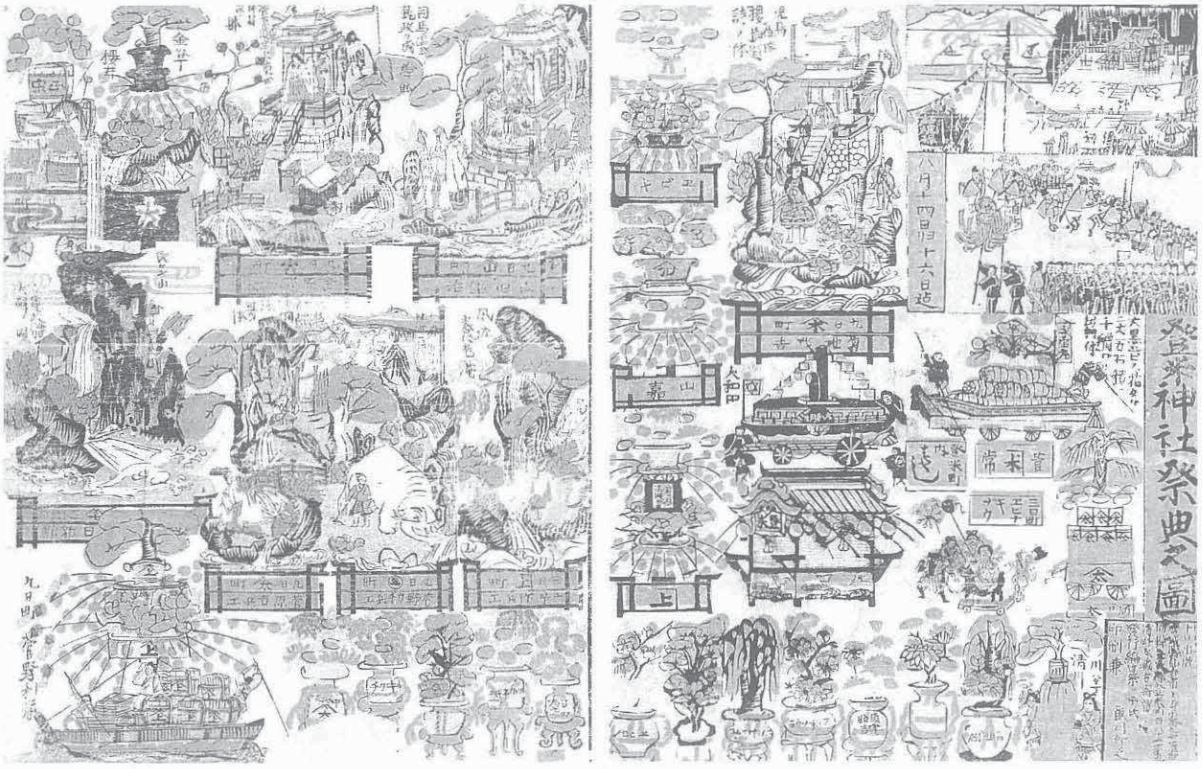


図４　明治25年・招魂祭

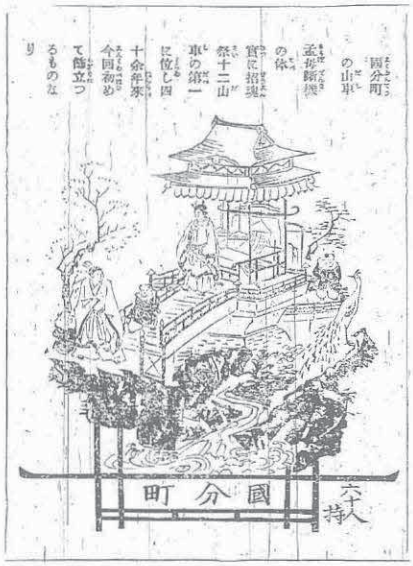


図５　「招魂祭山鉾の図」（明治25年）

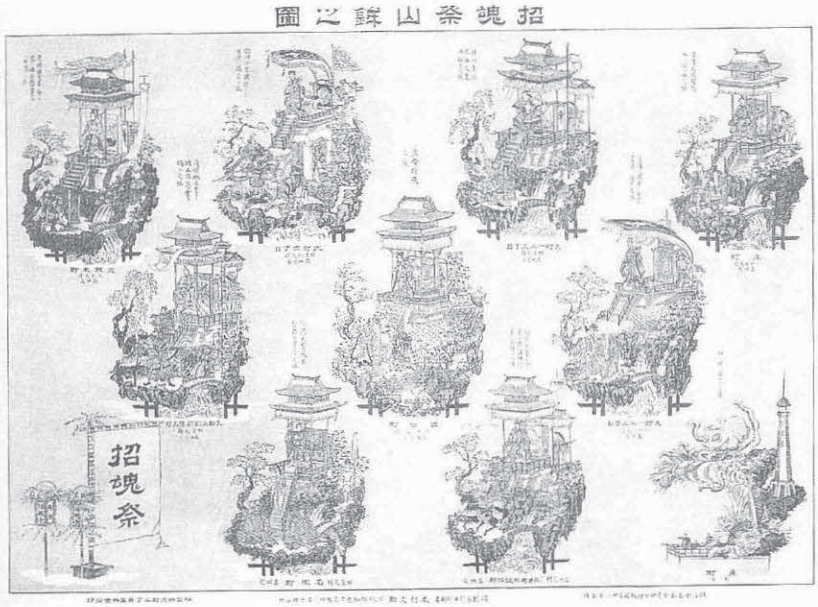
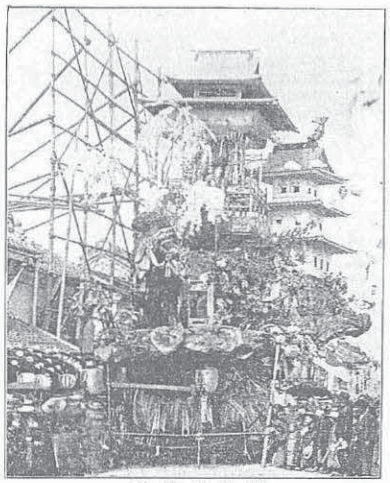
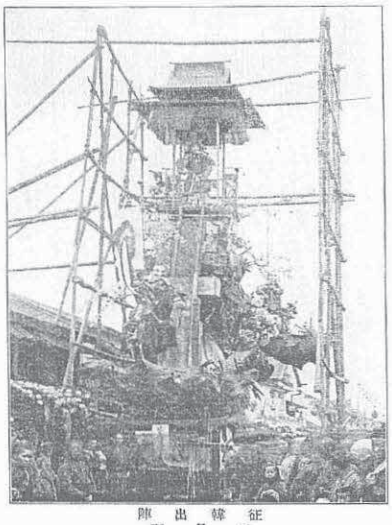


図６－①　明治32年・仙台奠都三百年祭



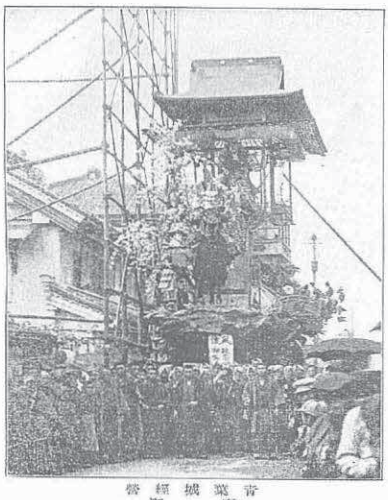
青葉城築城工
大町四丁目

図６－②



征韓出陣
二日町

図６－③



青葉城築城
南町

図６－④

牡丹畑
北鍛冶町

図６－⑤

征蘆長常倉安
大町五丁目

図６－⑥

蟹　大

図７－①　「東照宮祭礼の図」（『仙台年中行事絵巻』・嘉永３年）

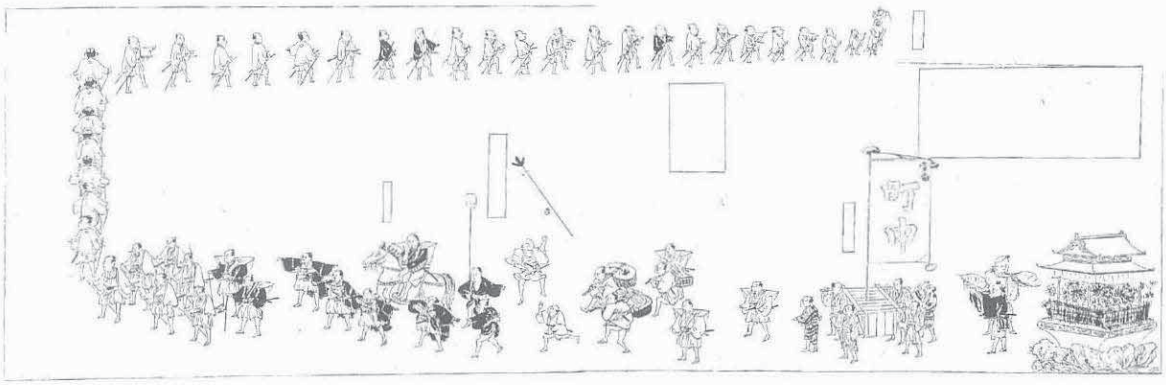


図７－②

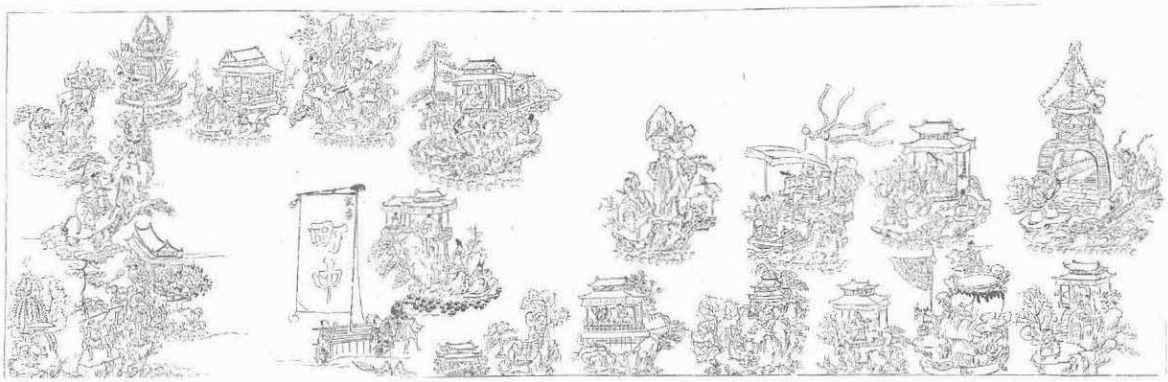


図７－③

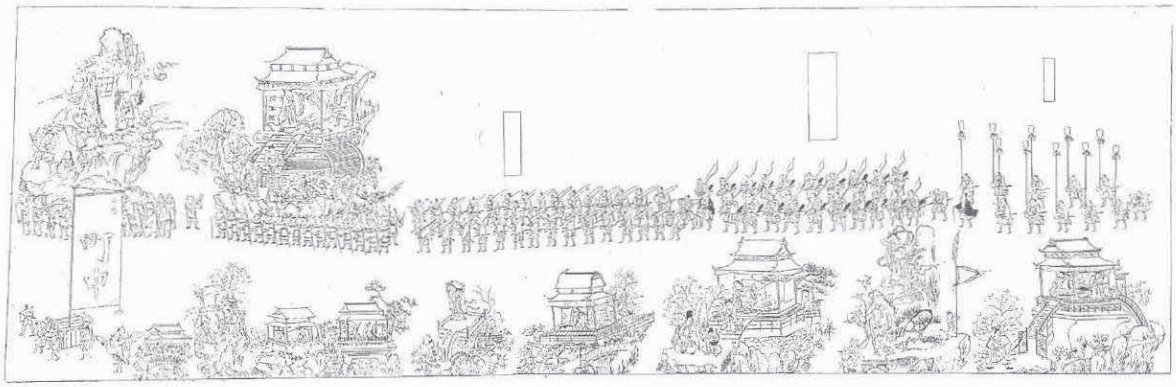
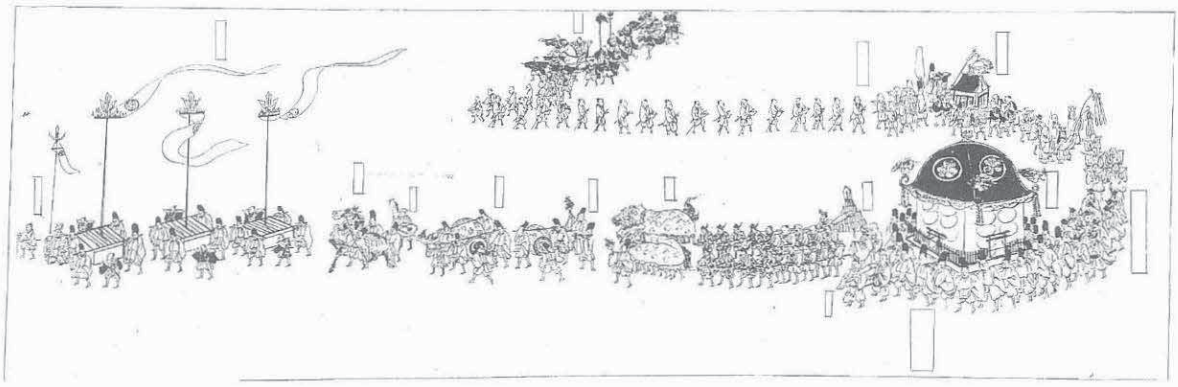



図７－④